

アントニン・レーモンドの設計理念におけるモダニズムと日本建築について —旧イタリア大使館夏季別荘を通して—

A study on the Japanese architecture and modern design principle of ANTONIN Raymond: In a case study on the old Italy embassy summer cottage

奥富利幸・仁村美予⁽¹⁾

Tbshiyuki OKUTOMI, Miyo NIMURA

1. はじめに

旧イタリア大使館夏季別荘は、レーモンド(図1)の作品のなかで、注目されることが少なかった作品であり、レーモンド自身も、この建物について多くを語ることはなかった。しかしながら、この作品は、日本的な空間構造を取入れたのみでなく、内壁や天井に杉皮張りが施されるなど細部の至るまで日本の伝統的手法が導入されている点において、レーモンドと日本建築の接点を探る上で貴重な作品である。さらに、この作品には、レーモンドがモダニズム建築の正当な推進者として飛躍してゆく上での重要な設計意図が多く盛り込まれている。そこで、レーモンドがどのような精神、設計理念を持ってこの作品を計画・設計したのか分析することで、レーモンドの設計理念におけるモダニズムと日本建築との相関を明らかにしたい。



図1 アントニン・レーモンド
出典:『自伝アントニン・レーモンド』1970年

2. 旧イタリア大使館夏季別荘の概要

旧イタリア大使館夏季別荘(図2)は奥日光中禅寺湖の東岸、砥沢地区にあり、中宮祠から半月山に至る中禅寺スカイラインから湖畔に下る日光市道1059号線と湖畔の間に位置している。周辺は、中禅寺湖畔沿いにブナを中心とした様々な種類の広葉樹の森林が広がっており、中禅寺の町の賑やかさとは切り離された大変静かな場所である。旧イタリア大使館夏季別荘の建設された時代背景として、当時、別荘の建てられた中禅寺湖畔が国際避暑地としても映やされていたことが指摘されている。『旧イタリア大使館夏季別荘改修工事報告書』によれば、こ

の地区が国際避暑地として興隆するきっかけとなったのは、1872年(明治5年)に当時英国公使館書記官であったアーネスト・サトウが横浜の英字新聞「ジャパン・ウィークリー・メール」に中禅寺への旅行案内を連載し、その後1875年(明治8年)刊行の「A GUIDEBOOK TO NIKKO」などにより在日外国人達の中に広く紹介されたことによる。また、1890年(明治23年)には宇都宮から日光まで鉄道が延長され、外国人の来訪者がさらに増え、日光は多くの避暑客で賑わった。1887年(明治20年)には中禅寺湖畔で初めての外国人所有の別荘が建てられ、以降、中禅寺湖畔には次々と各国外交官や政府関係外国高官らの別荘が増えていった。そうして、奥日光は「国際避暑地」として海外に知られるようになっていった。大正の末頃には湖畔の外交団の別荘は、イギリス、ベルギー、フランス、トルコ、スイスの各大使館別荘をはじめ40戸近くを数えるようになり、その後、昭和3年にはイタリア大使館夏季別荘が建てられることになる。この建物の建設経緯について、レーモンドは、「日本で最初に出会ったイタリア大使は、デ・ラ・トーレ大使であった。軽井沢の教会や、私の夏の家を建てた大工たちが、日光の中禅寺に夏期のイタリア大使館を建てた。非公式な居間と食堂の組み合わせは、当時決して許されることではなかった。この因習からの脱却は、当時では革命的と考えられた。この建物は10年が寿命だと思われたが、40年後でもまだ使っている。」¹⁾とだけ述べている。実際には1928年の建設後から少しずつ補修をしながら1997年(平成9年)までの69年間、大使館別荘として使用されていた。長年の使用により老朽化、建物の変形が進んだためイタリア政府から栃木県に譲渡され、日光国立公園奥日光地域総合整備基本計画に基づく「中禅寺湖周回線歩道附帯施設整備工事」により、湖畔周回歩道の拠点施設として、また、国際避暑地日光の歴史文化を伝える施設として整備活

(1) 有限会社 松盛堂

用されることになった。そして2000年(平成12年)7月に竣工された。本邸については保存活用の目的のため全面的な改築となった。構造材などかなりの部分を新材とし、躯体も新たに設計されたが、当時の外観やプラン、内装などを現存する図面や当時の写真に基づいて出来るだけ忠実に復原保存された。外壁に使われている杉皮には虫害が起きやすく、雨風による傷みも速いため、改修後も約10年に1度張り替えられるということである。改修後には、「イタリア大使館別荘記念公園」として本邸および副邸、その周辺地域が一般公開されている。また、本邸は2001年(平成13年)に国の登録有形文化財に指定された。



図2 旧イタリア大使館夏季別荘

3. 建造年代について

この別荘が建てられたのは、1928年(昭和3年)で、木造二階建ての本邸と木造平屋の副邸および管理人住宅からなっているが、本論では、本邸を研究対象とする。この1928年をレーモンドの作品年譜から見ると、ちょうど2つの主要作品の中間期に当たっていることがわかる。つまり、レーモンドの自邸である1923年(大正12)の壺南坂の家(図3)と、やはり、レーモンドの別荘である1933年(昭和8年)の軽井沢夏の家(図4)である。

この二つの作品は、レーモンドにとって、それぞれが節目となる重要な作品である。つまり、壺南坂の家は、日本のモダニズム建築にとって記念すべき作品で、この建築により日本のモダンデザインは世界に届いたと評価されている²。また、レーモンド自身も、この作品によって、モダニズム建築が始まったことを自認している³。そして、1933年の軽井沢夏の家は、コルビュジェがチリに計画したエラズリス邸(図5)を写したものととして、当時論争となった作品である。

夏の家について、レーモンドは、モチーフとして

エラズリス邸を参考にしたことを認めながらも、次のように述べている。「夏の家の主室のモチーフを除き、建物は全面に独創によるものであった。非常に強い日本的な香りを持ちながら、日本の形はまったく取り入れていない。⁴」つまり、レーモンドの見解では、壺南坂の家においては、ライトからの影響を逃れ、この夏の家においては、日本建築の理念をモダニズム建築に昇華させたと考えているのである。そして、この二つのターニングポイントに挟まれた時期に、イタリア大使館夏季別荘が設計され、竣工されたことになる。つまり、この時期に、レーモンドは、ライトからの呪縛を逃れ、日本建築によりモダニズム建築の設計理念を構築したのである。



図3 壺南坂の自邸(1923年)

出典:『私と日本建築』1967年



図4 軽井沢の夏の家(1933年)

出典:『自伝アントニン・レーモンド』1970年



図5 チリのエラズリス邸(1930年)

出典:『ル・コルビュジェ全作品集第2巻』1978年

アントニン・レーモンドの設計理念におけるモダニズムと日本建築について—旧イタリア大使館夏季別荘を通して—

4. 旧イタリア大使館夏季別荘の設計理念分析

旧イタリア大使館夏季別荘の設計理念の分析に当たり、アントニン・レーモンドが日本建築に対し、どのように評価していたのかを考えてみたい。

まず、レーモンドは、日本建築を総合的に評価している点に大きな特色がある。つまり、評価の指標が日本建築のディテールから生産組織にまで及んでいるのである。

日本建築形成の背景として、レーモンドは、まず、日本人が大自然に対し、絶対の価値を認め、そこに無限、不変の原則を見出し、それを基に、日本人の哲学や文化が形成されたと考えた。その結果、日本人の生活や芸術の中には、はかなさと永遠、あるいは脆さと強さの象徴が内的闘争となっているのだという⁵。本質を尊び、物に拘泥しない、いわゆる桜の儚さの美学が生まれる。一瞬の美しさでも、物の存在を越えて慈しむことを説いている。また、芸術に関して、一人の人間が真の芸術家であるかないかは、人間と大宇宙の間の関係を、自分の仕事を通して表現する能力があるかどうかで決まり、この点については、日本人の生活自体に芸術があることから学んだという⁶。こうした自然との共生から生まれた美学は、レーモンドの建築の本質を考える上での哲学となり、彼がモダニズム建築の設計を進める上でも基本的な設計理念として継承されたものと考えられる。また、この自然の一部としての建築を考える際に、建築に使われる材料についての重要性を説いている。住居を自然と密着させるために庭園を造るが、住居は、庭園の一部となる。つまり、住居自体は、庭園の草のようなものであり、材料が自然であれば、この接触が増して、住居を分解すると微細部は、大自然に溶け去るという。また、日本建築のタブーとして、サンドペーパー、釘、ペンキを挙げ、これらは、全てを自然のままに残すという原則に反しているという。つまり、建築を構成する素材や仕上げにまで、細心の注意が払われて、日本建築の美しさが実現しているというのである。

さらに、建築は、単純にするべきであり、最も簡素なものこそ、最も美しいとし、この特質を持つのが日本建築なのだという。この単純化することの美学は、レーモンドが日本建築から学んだ重要な理念であった。また、自然は人工よりも美しく、単純さと軽快さは複雑なものよりも美しい、建物の広さや材料において、節約は浪費よりも美しい結果を生む。

ものの本質に近づくためには、自然でなければならず、無駄も排除せねばならぬ。そうした過程こそが建築のデザインということになる。そして、レーモンドは、こうした日本の優れた芸術を理解する環境で仕事をできたことに深く感謝していた。このような、レーモンドの日本建築から受容した設計理念を、自然との共生、単純性、自然材料と意匠、生産組織のキーワードに区分して分析したい。

分析に先立ち、旧イタリア大使館夏季別荘の空間構成について確認しておきたい。

1階(図6)の南東に玄関ホールが設けられ、階段と便所が配置されている。建物の中心に、居間、書斎、食堂の3つの部屋が一続きとなり、奥行き3間(5.454m)、長さ9間半(17.271m)の広々とした空間がある。また、この空間に面して、ガラスで挟まれた広縁(原設計図ではカバードポーチ)が、全面に設けられ、建物内部から中禅寺湖に向けて大きな開口が取られている。これは、明治期以来、普及してきたガラス戸のはめ込まれた廊下のある和風住宅の手法を取り入れたもので、レーモンドにとっては、初めて引き違いガラス戸と雨戸による全面開口を実現したものだろう。食堂の奥には二方をガラスで囲んだ客用寝室、南側には台所とパントリーが食堂に隣接して設けられている。そして、客用寝室の裏の廊下を挟んで、台所脇の浴室と二階の寝室群への裏階段が設けられている。

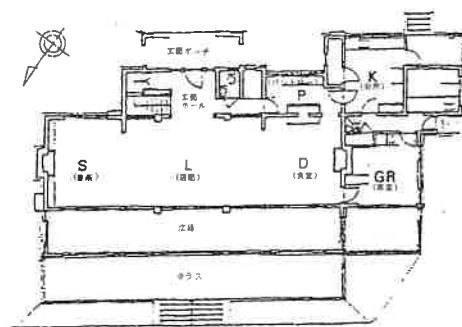


図6 本邸1階平面図

出典:『自伝アントニン・レーモンド』1970年(加筆作成)

二階(図7)には、玄関ホールから階段を上がってすぐにホールが設けられ、廊下を挟んで湖畔側に4つの寝室がある。そしてホールに面して南東側にはスリーピングポーチがあり、寝室群と廊下を挟んで便所と家事室が置かれている。

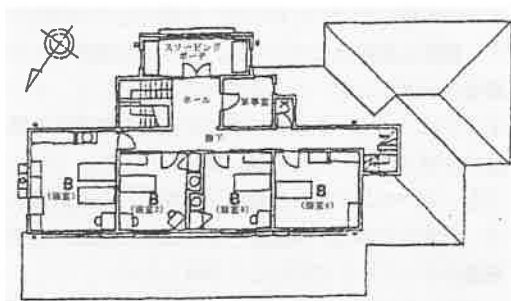


図7 本邸2階平面図

出典：『自伝アントニン・レーモンド』1970年（加筆作成）

（1）自然との共生

レーモンドにとって、建物は、それ自身で完結したものではなく、言わば、自然の一部となるのが本来の姿なのである。そして、自己と自然とを同一視できる世界で唯一の民族が日本人だとレーモンドは述べている。日本では、建物を取り巻く自然、それを集約した庭の持つ意味は、建物と同様に重要であり、この庭には、石が据えられ、苔むす大地があり、雨のしたたる、幾ばくかの木がある。そこで、日本人は、一日中畳の部屋の真中に座り、遠くに思いを馳せるという。また、住居自身は、周辺の庭園の一部であり、庭園の中に生えた葦のように育ち、材料と形を、植物や大地、砂利、石のごとく、自然に包含させるものと説く。まさに、住まいと自然が日本人の哲学で結ばれていることになる。そして、住まいの内部に外の気配を伝えるのが、開口部である。レーモンドは、これをヨーロッパにない日本建築の大きな特色として説明している。つまり、建物は、大自然自身であるが、大自然と住まいを結びつける手段として、大きな開口部とか、中庭をつくり、大自然との直接の交流をつくり出している。また、大きな開口部の効果として、空間の創造を挙げている。つまり、部屋に庭の景色が取り込まれることで、小さな部屋から大きな外部の世界を掌握できるのである。さらに、この点については、日本建築と現代建築の双方に相通じる原則であると述べている。ここに、日本建築とモダニズムの接点を指摘している。

旧イタリア大使館夏季別荘本邸は、その周辺を様々な種類の広葉樹によって囲まれ、大変緑に恵まれた場所に建っている。眼前には中禅寺湖が広がり、男体山を中心とした大小の山々がそれを囲む。こうした恵まれた自然の中に溶け込んでたたくむこの別荘は、敷地に対して北西の向きに大きな開口が取ら

れ、中禅寺湖に向かって開放されている。この建物のデザインで、土地につながり結びつける点で重要となったのは、中禅寺の湖畔に立地するということである。主要な室はすべて中禅寺湖への視界を意識して計画されている。レーモンドは、日本建築とモダニズム建築におけるデザインの基本的要件として、「方位」を挙げている。すべての部屋を南に向けて大きな開口部を設け、また、北側には換気に必要な開口を設けることで風が通るようになり、夏は涼しい風を受け入れ、冬は南の窓からいっばいの日光を入れて部屋を暖かくする。そして、北側の開口により、湿気によるカビの発生を防ぐという日本建築の伝統をたよりに計画をしてきたと述べている。この原則は、この作品の前後の時期に建てられた霊南坂の自邸や、軽井沢の夏の家などにも見られるが、旧イタリア大使館夏季別荘では、北西の向きに大きく開放し、南東には最小限の開口が取られる設計となっている。あえて方位の原則を守らなかったことの理由として、旧イタリア大使館夏季別荘は、中禅寺湖への視界が計画を行う際の一番の要件となったためである。（図8）



図8 中禅寺湖の眺望

2階寝室から見た中禅寺湖の風景

そして、こうした計画が実現できたのは、この建物が、夏季限定で利用される別荘であったからだと言えるだろう。このように、建物を大自然の一部とするためには、立地条件に配慮した配置計画が必要であり、杓子定規に慣習を守るのではなく、場合によっては、支障のない範囲で変更できる点に、レーモンドの柔軟な設計姿勢が見てとれる。

また、中禅寺湖への視界を重視した点は、自然の移り変わりを観賞し祝福する可能性を与える開口部や、平面の設計にも反映され、詳細な部分にまで徹底されている。たとえば、書斎、居間、食堂（図9）

アントニン・レーモンドの設計理念におけるモダニズムと日本建築について―旧イタリア大使館夏季別荘を通して―

と広縁(図10)を区切る部分では、建具ばかりでなく、その上部にある欄間にもガラスが入れられて開放感を確保している。さらに、居間と玄関ポーチとを仕切る壁にも、ガラス窓がはめ込まれ、その結果、中禅寺湖とは反対側の南側に位置する玄関や階段、廊下にまで中禅寺湖の風景を取り込むことで、玄関を入った瞬間から、どこにいても中禅寺湖の風景を見ることができる配慮がなされている。また、2階の寝室群については各部屋に大きな窓を設け、中禅寺湖への視界が開かれている。そして正方形あるいは長方形の窓枠によって湖の風景は切り取られ、まるで一枚の絵画を見ているかのような効果を生み出している。

以上のように、建物の配置計画に当たっては、周辺の自然と建物が渾然一体となるように考えており、さらに、その設計理念は、平面計画にも波及して、そこに住む人間が、常に自然と向き合えるように開口部を設けている。そして、こうした設計理念にレーモンドを導いたのは、日本人の自然と共生する哲学であり、美意識であった。



図9 居間、食堂

一続きになった書斎、居間、食堂



図10 広縁

中禅寺湖を臨む広縁。全面に大きな開口部をもち、ガラス戸がはめ込まれている。

(2) 単純性

レーモンドによれば、建築の美は、単純にすることにより表現され、これは日本建築に顕著に現れているという。そして、最も単純な形は、最も望ましく、出来上がれば常によい結果になるとして、空間を整然と組み立てることの重要性を説いている。そして、単純するのは、個々の形ばかりでなく、それらで構成される空間にも適用される。その結果、建物の機能性も向上させるという考えを持っている。この建物においては、1階、2階共に単純な平面構成であり、1階部分は居間、食堂などの公的な空間であり、2階部分は寝室などの私的な空間である。つまり、この建物においては、空間の形と機能を単純化して、構成していることが分かる。

また、柔軟な使い方ができる空間は、現代建築に必要な要素であるとして、空間の単純化に加えて、その空間の柔軟な使われ方についても、新しい試みを行なっている。つまり、1階では、本来、別々に区分されていた書斎、居間、食堂を単純に並べて、各部屋の仕切りを設けずに、開放したのである。そして、書斎、居間、食堂は、広縁とガラス戸を介して区分され、ガラス戸を取り払えば、さらに大きな空間となって広がり、広縁と外部を隔てるガラス戸を開放すれば、密閉した部分はたちまち外気に開放した部分へと変わるといのである。この点は、当時の住宅の概念では画期的な試みで、作品の解説では、「非公式な居間と食堂の組み合わせは、当時決して都市では許されることではなかった。この因習からの脱却は、当時では革命的と考えられた。」⁷⁾と述べており、レーモンドが、従来の慣習を打ち破る考えで行なったことがわかる。

そして、平面計画における単純性は、建物のボリュームにも展開されていた。北立面図(図11)では、平面計画での1階と2階の公私の区分が、立面の開放性と閉鎖性で表現されている。つまり、1階部分は、一面にガラス戸がはめ込まれ、2階には、壁に大きな窓が各部屋ごとに穿たれている。また、東立面図(図14)では、1階の書斎、居間、食堂の一連の空間とその中禅寺湖側に取り付く広縁、さらに、広縁と反対側につく玄関ホールと玄関ポーチというシンメトリカルな空間構成の明快さが、外観に反映されている。さらに、この建物には、水平性に基づく安定感があることも明らかである。つまり、1階の書斎、居間、食堂の一続きの間と広縁、および、2

階の寝室群が中心となつて一つのボリュームを形成し、客用寝室や風呂、キッチンがそれに付加されるという構成になっている。そして、中心となるボリュームは、南立面(図13)によれば、屋根の形式、中央玄関ポーチの窓の位置、煙突などが左右対称である。こうした安定感は、内部空間の組み立ての明快さを反映したものである。

さらに、単純性によって生じる効果で、壁によって閉鎖された空間が開放され、ガラスの建具を用いることで、光と空気を内部空間に満たすことができるのである。このように、日本建築に顕著に現れているという単純性は、この旧イタリア大使館夏季別荘にも反映され、モダニズム建築における重要なテーマとなっている。

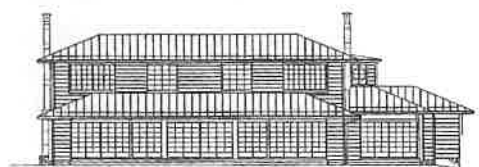


図1-1 北立面図

出典：『旧イタリア大使館夏季別荘改修工事報告書』2001年

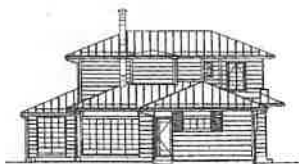


図1-2 西立面図

出典：『旧イタリア大使館夏季別荘改修工事報告書』2001年

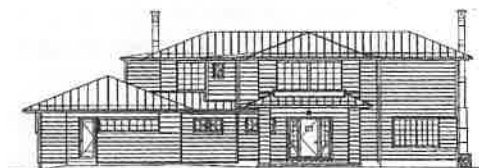


図1-3 南立面図

出典：『旧イタリア大使館夏季別荘改修工事報告書』2001年



図1-4 東立面図

出典：『旧イタリア大使館夏季別荘改修工事報告書』2001年

日本の住居は、材料が自然であるから、分解してゆけば、その微細部は、大自然に溶け去る。それは、日本人が、山の木、浜の砂、わら、葦、竹など、身近にある材料を準備し、これらを使うための知識を持っているからできるのであり、そこには、材料と人間の間に、親密な関係が形成されているのだという⁸。レーモンドがあらゆる自然素材を優れた調和をもってデザインできる所以は、このような自然材料を自由に使いこなすことのできる日本人の技と知恵を学んだからだと考えられる。そして、材料は、いずれ朽ちてゆくのであるが、新しい材料が香りが消えるまで導ばれる一方で、風雨にさらされ、さびた材料も同様に好まれ用いられる。それは、さびもまた自然だからである。

この旧イタリア大使館夏季別荘では、主要な壁仕上として、杉皮と柿板併用による模様張りが用いられている。日本の伝統的な材料と工法を用いたのは、身近に存在する天然材料を用いて、自然への近接性を高め、この別荘を奥日光のすばらしい自然の中に溶け込ませることを意図したためであろう。

杉は、地元日光が日光杉の産地であり、地場の材料を選ぶことが、周囲の自然と調和させる上で最適と考えたのであろう。

この杉皮と柿板による模様張は、外壁には、縞模様や市松模様の構成(図15)、内壁には、幾何学的な構成(図16)など、様々に展開させている。つまり一つのデザインモチーフを多様に展開することは、たくさんのもを使うよりは、美しくなる機会があるかに多くなるというレーモンドの設計理念に基づくものである。また、構造材のスパンによって、仕上げ材料を秩序正しく配置し、その繰り返されるリズムが重要なのだという。こうした設計理念の形成は、障子や畳などで構成される矩形の入り混じる幾何学的構成が、光による陰影や外部の自然と結びついて、日本建築の調和の美学へと導くという観点から醸成されたものである⁹。

たとえば、書斎(図16)の室内意匠には多くの幾何学形体を用いた構成になっている。暖炉回りの構成では、展開図(図18、図19、図20、図21)を見て分かるように、押縁の割り竹が幾何学的に割り付けられ、そこに、杉皮と柿板が多様に組み合わせで張られている。また、幾何学形体は壁だけでなく天井まで及び、居間の天井は、押縁の割り竹により亀甲状の形(図17)や、書斎や食堂では正方形が用いられ、

アントニン・レーモンドの設計理念におけるモダニズムと日本建築について―旧イタリア大使館夏季別荘を通して―

市松、網代、矢羽などで、杉皮と柿板が多様に組み合わせられて張られている。これらの室内意匠の構成は、日本建築に見られる幾何学形体をデザインモチーフにしており、天井や壁の割り竹は、押縁という工法的役割だけではなく、障子の棧の陰影のように照明を受けたときに陰影を浮かび上がらせる効果がある。また、書斎内壁の割り竹のモチーフは、畳のへりの交叉を手本としているように見える。さらに、居間の天井の割り竹のモチーフである亀甲や杉皮の網代、外壁の市松模様などは日本の伝統的な文様である。このように伝統的な文様を斬新なデザインにシフトして取り込み、モダニズム建築に再生させている。こうした点にも、レーモンドが、モダニズム建築のデザインモチーフに日本建築から多くの要素を導入していたことを垣間見ることができる。そして、76年を経た現在でも、決してモダンな空間の雰囲気は色あせてはいない。



図15 外壁の模様と開口部
杉皮と柿板併用による外壁の構成。



図16 書斎内観
割り竹の押縁による幾何学形体の壁面構成。



図17 天井の幾何学模様
居間天井の亀甲形のデザイン。

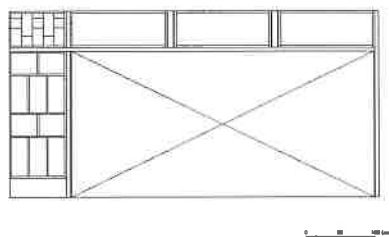


図18 書斎 北面展開図 (筆者作成)

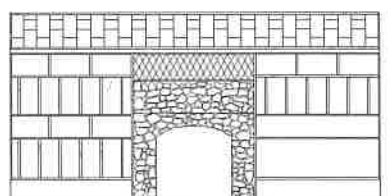


図19 書斎 東面展開図 (筆者作成)

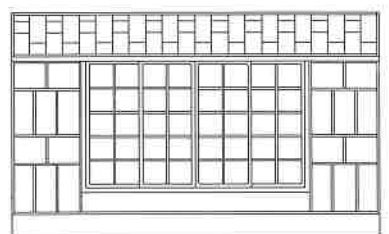


図20 書斎 南面展開図 (筆者作成)

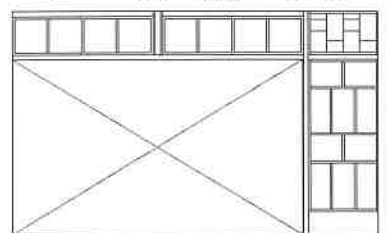


図21 書斎 西面展開図 (筆者作成)

(4) 生産組織

レーモンドと内山隈三の承認サインのある設計図のうち矩計図には注意として、「各部構造及造作共材料ハ指定セズ山材ヲ配スルコト妙味アリ」と記入されている。また、小屋組についても、図面では洋風の真東小屋組となっているが「小屋組ハ和小屋組ニテモ可」との注記があり、かなりの部分を大工の裁量に任せていたことが分かる¹⁰。これは、レーモンドが、日本の大工の知識と出来栄えのよい仕事に対して評価していた証であり、大工に仕事を任せることで土地の特色をよりうまく生かした別荘建物にしたいという考えがあったためであろう。また、それだけではなく、レーモンドは材料の材質、色、肌触りにまでこだわりを持ち、その結果、素材自体の選択の自由度を増すことができた。つまり、どんな素材を用いてもデザインできる力量があったということが伺える。

レーモンドは、日本建築の優れた特質が、単に設計者のデザインに関わっているのではなく、優れた工匠の存在があってこそ実現していると考えている。工匠、つまり、棟梁や大工による仕事は、知識といい、出来栄えといい、常に驚きであり、建物を形成するあらゆる要素を湧き出させる基礎になっている。柱は柱、梁は梁、ありのままで無装飾、そして、仕事は完全無欠である。建物の中では、いかなる材も無駄なく、働きのない材はない。不要物の省略は完全に徹底し、その基準は、効果と経済性によって判断されているという。また、現在の建設者と建築家は、昔の大工であった。大工は、現代でも仕事の先導者となり、長い徒弟時代を過ごして一人前になるが、彼らは、詳細図を平らな板に書いて仕事を進め、道具は古来のもので手製もある。そして、この工匠に肖り、レーモンド自身も、昔の大工の役目を果たそうと考えたところ、設計ばかりでなく、何もかも自分でやらなければならないことに気がついた。その結果、彼の事務所には、建築家、大工、見積屋、構造技師、設備技師が揃っていたという。つまり、総合的な見地に立って仕事をしなければ、優れた日本建築は実現せず、それは、モダニズム建築にも相通ずると悟ったのである。

そして、建築家は建築そのものを通して修練を積むべきであり、いかにデザインすべきかは、建物を通してのみ学ぶことができると考えていた。この直接の接触のみが、「建築家」すなわち「マスター・ビ

ルダール（工匠）」の名にふさわしい人を作るのだと述べている。このように、優れた日本建築の背後には、優れた生産組織があることに気付いたレーモンドは、それが、全くモダニズム建築にも当てはまることを悟り、自らそれを実践して見せたのである。

5. まとめ

この旧イタリア大使館夏季別荘は、材料は構造材に限らず外装、内装にまでふんだんに自然材料を用い、中禅寺湖への視界により導かれた平面計画や開口部によって建物の中にまで自然を取り込むことを徹底し、土地の立地条件を余すところなく生かした建物である。平面計画では、レーモンドの設計理念の単純な空間構成を反映し、1階では、書斎と居間と食堂が一つの空間で収められて、日本建築のように個々の部屋が、自由に使えるような柔軟性を持たせている。また、建物の内部に外の自然を取り入れるために用いたのは、明治期以来、日本の住宅で広く普及していたガラス戸であり、これによって、空気や日光を自由に取り込むことを可能にした。これは、レーモンドが初めて引き違いガラス戸と雨戸を全面開口に実現したものであり、この時期にレーモンドが深く日本建築の特質を自らの設計理念に取り込んでいたことが伺える。また、当時、都市では許されなかった非公式な居間と食堂の組み合わせを用いるなど革新的な試みを実施している。さらに、壁や天井では、押縁の割り竹が亀甲形などで幾何学的に割り付けられ、杉皮と柿板を市松、網代、矢羽などで多様に組み合わせて張られたことは、日本建築の伝統的な文様を新しいデザインモチーフとして試行することで、レーモンドが日本建築の伝統的意匠をモダニズム建築に援用しようと試みたことが伺える。そして、レーモンドの創意工夫によって、独自の質の高い意匠を実現している。

以上の考察により、旧イタリア大使館夏季別荘はアントニン・レーモンドの作品の中でも、レーモンドが日本建築の優れた特質を活用して、モダニズム建築の設計理念を構築する重要な時期の作品であることが分かった、この作品の洗練された空間構成と意匠は、構築されつつある設計理念の確かさを示すもので、その後にレーモンドがモダニズムの建築家として飛躍することを暗示するのに十分な魅力を醸し出している。

アントニン・レーモンドの設計理念におけるモダニズムと日本建築について―旧イタリア大使館夏季別荘を通して―

謝辞

現地調査にご協力頂いた旧イタリア大使館別荘記念公園の杉本氏、資料の提供をして下さった栃木県庁自然環境課施設担当の大森氏に深く感謝致します。

参考文献

- アントニン・レーモンド『私と日本建築』1967年
 アントニン・レーモンド『自伝アントニン・レーモンド』1970年
 栗田勇『現代日本建築家全集 1 アントニン・レーモンド』1971年
 栃木県『旧イタリア大使館夏季別荘改修報告書』2001年
 福田和美『イタリア大使館別荘』栃木県教育委員会事務局文化財課編集『栃木県の近代化遺産』平成13年所収
 藤森照信『日本の近代建築（下）―大正・昭和篇』1993年

ないかは、その人間と大宇宙の間の関係を、自分の仕事を通して表現する能力が、あるかどうかによって決定される。人間は、大宇宙と触れることによって幸福となる。神と自然とは人間をとりまき、自分自身がその身近にいることを感じる。」アントニン・レーモンド『私と日本建築』p178

⁷ アントニン・レーモンド『自伝アントニン・レーモンド』p108、1970年

⁸ 「日本人は、全く身近にある材料を使い、遠い山から運ばれてきた木、ここかしこの浜の砂、良質のわらと悪いわら、きめ細かい葦と粗い葦、あらゆる種類の竹、これらについてさらに親しく知ろうとする。また、材料がどのようにしてできたものか、職人がこれをいかすかを知っている。だからこそ、材料と人間の間に、ある親密な、人間的な関係が存在しているのである。」アントニン・レーモンド『私と日本建築』p58

⁹ 「野暮という言葉も、日本建築にはあてはめられない。偶然もなければ、18世紀の様式の模倣もなく、自然の中に自己を没しようとする願いがあるばかりである。装飾的という言葉を日本の芸術に与えるのもあやまりである。日本の芸術は、ただ全体の調和のとれた形を目指しているのである。」アントニン・レーモンド『私と日本建築』p13

¹⁰ 栃木県『旧イタリア大使館夏季別荘改修報告書』p6、2001年

「受理年月日 2004年9月30日」

¹ アントニン・レーモンド『自伝アントニン・レーモンド』p108、1970年

² 「一九二四年に第一号のシュレーダー邸、翌年にカフェ・デ・ユニが完成する。デ・スティールによって先鞭を付けられた白と直角の美学を20世紀建築の世界のリーダーたちが実現するのは、コルビジェがシトロアンハウス型住宅第一号のヴォークルソンの住宅で一九二二年、グロピウスがワイマールのバウハウス校長室で一九二三年となる。一九二四年のレーモンド邸の早さが納得されよう。日本のモダンデザインはレーモンド邸によって世界の先端に届いたのである。」藤森照信『日本の近代建築（下）―大正・昭和篇』p209、1993年

³ 「私の作品の中でも初期の、一九二一年の星商業の講堂とか、東京女子大学とか、故後藤新平伯爵の住宅には、まだライトの影響が残っている。しかし、私の本当の現代建築は、一九二三年今のアメリカ大使館裏に、私自身の家を建てた時に始まった。だから、本当の現代建築は、アメリカに先駆けて、ヨーロッパと日本でうまれたのである。この完成は関東大震災の翌年であった。」アントニン・レーモンド『私と日本建築』p185、1967年

⁴ アントニン・レーモンド『自伝アントニン・レーモンド』p118、1970年

⁵ レーモンドは、この証として、次のような事例を紹介している。「たとえば、庭園では、堅固な石垣の上にある竹垣が、常時新しくされるのがそれにあたる。経済の問題はそこになく、心の表示の問題となる。物は、日本人の生活にあっては、単なる事柄ではなく、思想の象徴となるのである。」アントニン・レーモンド『私と日本建築』p170

⁶ 「私は日本から沢山のことを学んだ。その中で最大のものは、生活の芸術であった。建築家にとって重要なことは、外観や材料でなく、それをつくり出す哲学である。つまり、建築家に重要なのは、構造や形体の背後に横たわる思想であり、思考なのである。一人の人間が真の芸術家であるか

